

関西生命線代表

伊藤 みどりさん (72)

中台出身者の孤立防ぐ

なになびと

大阪
市内大阪本社社会部
☎06(6231)0131(代)
fax 06(6201)3143
mail: o-syakai3
@asahi.com広告のご用は
朝日エリア・アド
06(6221)2923
大阪朝日広告社
06(6205)8080
折り込みは
朝日オリコミ大阪
06(6226)1290購読のお申し込み
配達お問い合わせ0120-33-0843
(7:00~21:00)@asahi_osakaban
大阪版のツイッター
つぶやいています。

生まれ育った台湾で、「生命線」は「いのちの電話」を意味する。日本国内で初めての台湾語、北京語によるいのちの電話「関西生命線」を開設して、昨年11月で30年を迎えた。

新型コロナウイルスの影響で、「開設30周年記念 感謝の集い」は延期のままで。でも、「あつという間でした。本当にみなさんの支援のおかげです」と、いつも真っ先に感謝の思いが言葉になって出る。

日本人の夫と結婚し、大阪市西区で暮らし始めたのは1977年。初めはホームシックになり、頻繁に故郷へ電話した。おなかに子どもを抱えながら日本語学校に通い、夫に支えられながら2人の娘を育てた。

バブル真っ盛りの88年、大阪・ミナミで、台湾から働きに来ていた女性の自殺や自殺未遂が

4件相次いだ。同じ台湾の出身者として心が痛んだ。それが背中を押した。中国や台湾出身者のための「生命線」をつくらなければ、と。労働組合や留学生ら多くの人々の協力で90年11月、開設にこぎ着けた。

日本に長年住む台湾人のボランティアたちと相談を受けてきた。留学生や国際結婚の夫婦らが相談を寄せ、30年間で約1万件を超えた。相談者の多くが孤独を抱え、近年のデータを分析すると、「自殺を考えた人」の割合は1割ほどある。

「まず聞くこと」を心がける。「葉っぱでもつかまっていれば助かる可能性があります。つかまるかつかまらないかはクライアント(依頼者)次第ですけど、つないでいくことが大事です」。連絡が途切れたら、「自殺しないか心配」と、い

までも居場所をたどっていく。「それが世の中のリアリティーですよ。日々勉強です」

孤立を防ぐ交流の場にと、旧暦の大みそかに「水餃子・火鍋大会」、十五夜には「お月見大会」を開き、日本人も含め毎年数百人が参加する。夏には学生らの国際交流勉強会も開く。

活動は社会的にも評価され、2011年には「子ども若者育成・子育て支援功労者」の内閣府特命担当大臣表彰を、18年には社会貢献支援財団(東京)の社会貢献者表彰を受賞した。

根っこにあるのはクリスチャン精神だという。他者への配慮を絶やさず、労苦をいとわない。その原動力はと尋ねると、「私、(そうすることが)好きですよ。少しでも相手に安心してほしいから」とほほ笑んだ。

(編集委員・副島英樹)



いとう・みどり 1948年、台湾・高雄市生まれ。大学卒業後、いのちの電話「高雄生命線」にソーシャルワーカーとして携わる。77年に来日し、大阪市西区へ。90年11月にボランティア団体「関西生命線」を設立した。相談電話(06・6441・9595、火・木・土の午前10時~午後7時)のほか、交流イベントを続ける。